

3月11日14時46分、東京都江東区民センター7階会議室。

「本日の研修総括会で、この2週間の研修成果と感想、特に当《交流協会》の受入れ態勢と研修プロジェクトに対して、是非とも研修団の皆様の貴重なご意見を聞かせて、……あー、じ、地震のようだ、でも、皆さん、大、大丈夫です。万が一、じ、地震がひどくなれば、わ、わたしの掛け声一つで、テ、テーブルの下に潜りましょう」。

それは、私が「大分人材育成地域文化交流協会」後藤佐代子会長の委託で、翌日北京に戻る予定の「北京イチゴ研修団」一行13名と共に総括会議を始めたときの一コマだった。突然未曾有の大地震に巻き込まれ、呆然とテーブルを抱きつくもの、開いた口がふさがらないもの、慌てふためく団員たちを前に、十数年の地震生活で鍛えられた経験がいきなり私に勇気を与え、普段ではなかなか作れない微笑みを見せながら、慰めの言葉を連発させ、団員たちを恐怖のどん底から引っ張り出そうと、マイクを握る拳に力がこもっていた。

しかし、今日の地震は並大抵ではないことが、言われなくても分かった。どーん、という突き上げられるような叩き上げに続き、右かと思うと左に引っ張られること3分間以上。歩くどころか、テーブルに一生懸命しがみつくのが精いっぱいだった。「今日は命の終わりがかな」、との恐怖も一瞬脳裏をよぎった。

それでも、年齢的に後輩かつ地震初体験の団員たちにとって、司会席に座る私の顔が衆目の凝視される「的」となっていることを十二分承知しているので、団員たちをこれ以上慌てさせまいと、微笑みと平気顔の繕いにありとあらゆる知恵を絞りだしていた。

ガタガタ、ギーギーとい不気味な音が地鳴りと共に響き渡り、表の笑顔と裏腹に、いつまでか、いつまでかと、心のなかで祈っていた。

その祈りの神通力のせいなのか、3、4分後、激しい横揺れがピタッと止まった。

「よし。皆さん、車に引上げよう」。団員たちは一目散に階段を飛び下りていき、ビルの外に走り出した。外の道路という道路は、すでに走行中の車が見当たらず、先ほど建物の中にいた人間をはじめとするあらゆる動物が例外を除いて全員雪崩を打って屋外に出てきた。犬も猫もネズミも含めて。

下町の江東区でもこんなに人が多いんだ、とびっくりするほどの人出だった。

地震慣れの東京っ子たちは、さすがに今日だけは沈痛な面持ちに変わった人が多い。誰かから命令されたように、ほとんどの人が携帯電話のキーを叩いている。十中八九通じないが、それでも啄木鳥のように同じ動作を繰り返す。

「母ちゃんなの、大丈夫かね？良かった」との安堵の声を、近くの若い女性から発せられると、隣の見知らぬ男性も思わず大きく頷いた。

ガタガタ、ド、ドンーと、余震がまた大地を襲った。でも、揺れる電信柱と抱き合ったり地面にひざまずいたりして、一度地震を経験した団員たちは二度目の余震を広々とした大通りで迎えたので、先ほどあった驚愕はほとんど顔に出なかった。町に出た避難民たちが間もなく分かったのは今度の地震中心地の東北地方はマグニチュード8.8の大地震だった（後ほどマグニチュード9.1に訂正された）。私たちが踏ん張っていた東京は、立ってられないほど、震度5強と言われた。

もう大丈夫だ。災いが通り過ぎた。むしろさっきの地震震動により、団員達の興奮が呼び起こされた。団長が先ほど会議室に飾り付けていた「北京市いちご研修団総括会」の横断幕を道端で高々と掲げ、井戸端会議ならぬ「道端総括会」を続行した。団員達にとって、この時撮った写真は掛け替えのない宝物となっただろう。

研修団として、幸いにも専用車を使っているのだから、研修日程を続けることにしたが、車は走行ではなく、文字どおりの牛歩なのだ。でも、その代りに、団員達は未曾有の大震災に見舞われた日本人の避難風景を目の当たりにし、落ち着き払って礼儀正しく、秩序良く行動する日本人の行動を、夢物語でも見ているように、ただただ感心するばかりで、あふれ出る感涙を抑えきれない人もいた。

いくら叩いても通じない携帯電話をやめて公衆電話に人々が殺到した——ある公衆電話ボックスの前に5～60人以上も並んでいるから、一人1分かかるとしても、1時間ぐらいいかかる計算だ。しかし、誰一人列に割り込む「賢人」が現れず、人々が黙々と長蛇の列をなしていた。

東京の交通機関がすべて麻痺状態に陥ったので、多くの人が勤務先か都内の公共施設に寝泊まりすることにしたが、無料で振る舞われた飲料水とお握りは冷たいものの、心を温めることができた。

それでも家族のことを心配して家路を急ぐ人が都外に通じる道路に溢れていた。しかし、溢れていても、みんな足取りをそろえて強行軍している軍隊のように道路上を整然と移動しているのだ。この風景はいつまでも頭に焼きついていった。

渋谷駅、新宿駅、東京駅など主要駅では、電車待ちの乗客で一杯になり、踏み倒れによる負傷者が出なかったと言われたので、これも不思議な、予想外の結果。

どこも避難民で溢れ、仕方なくビルの階段に座る場合でも、隣の通路を通る人のためにちゃんと開けておく。この景色をわざわざ文字にする日本人は日本中皆無と言えらるうが、海外のお客さんには、これも驚嘆に値するほどの場面だ。

被災後の日本人のこうした避難風景は、いちご研修団の皆様の予想外の見学・研修となり、一番素晴らしい研修成果として北京に持ち帰ることができたと、団員達が満足げに帰途に就いた。



村山富市元首相と研修団団員



「道端総括会」に集まる研修団